

中学校体育における選択制授業の工夫と評価

杉山 仁志

An Evaluation And Availablity Of The Elective Lessons In Physical Education At Junior Hight School

Hitoshi SUGIYAMA

This is a summary of research conducted on elective lessons given in Physical Education at junior high school. It is meant to give the reader an evaluation of the ideas and methods that will be presented together in material to help implement these elective lessons.

The structure and variety of the elective lessons currently available vary according to the school. In order to put these lessons into practice, it is often necessary for the individual instructors to dedicate a great deal of effort in both creating numerous course choices, as well as in designing the specific contents for each lesson. Furthermore, trying to take into consideration the specific wishes of the students inevitable creates a further demand on the time and effort needed by the teachers to implement these electives. Needless to say, this all creates a great strain on the teacher's ability to focus upon their own research.

In order to create a successful program, the individual teachers need to research various current examples of elective lessons. Moreover, they have to try and develop an elective lesson which, while meshing with their individual school's atomsphere, is also an effective part of a comprehensive lesson plan.

Ultimately it is each teacher's responsibility to create their own courses, based on their own experience and judgement. Perhaps the best way to deveiop an elective lesson that is meaningful and satisfying to all parties is through a process of trial and error, based on careful consideration and review.

キーワード：中学校体育 選択 生涯スポーツ 自主制

中学校及び高等学校の学習指導要領（平成元年告示）が改訂された。体育に関しての特徴は、運動領域や運動種目の幅が拡大された点である。体育授業における方向性は、「生涯スポーツ」、「個に応じた指導」を重視して改訂された。¹⁾²⁾³⁾⁴⁾¹¹⁾

これによって、選択制授業が導入され、学校体育の指導の在り方に大きな変化をもたらした。¹¹⁾¹³⁾

選択制授業は、生徒一人一人の特性が顕在化してくる中学校期に有効な学習形態である⁵⁾¹¹⁾が、

各学校体育をめぐる諸条件によってかなり制約を受けるという問題点もある。⁷⁾⁸⁾¹³⁾

そこで本研究では、中学校体育における選択制授業についての考え方及び授業の工夫、評価についてまとめ、選択制授業を実施する際の資料を提出することを目的とする。

1. 選択制授業の導入について

(1) 選択授業の考え方

学校体育は、生涯スポーツの基礎を培う役割を有している⁵⁾¹¹⁾ということを考えると、生徒が生涯を通じて、自己の能力、適性、興味、関心等に応じて、自ら運動を選択し実践できる能力を身につける事が重要である。¹⁾²⁾⁵⁾¹¹⁾

選択制授業は、その実現を目指すために実施され、又その果たす役割は大きい。¹⁾¹¹⁾

(2) 選択授業の目標

生徒の運動に関する能力、適性、興味、関心等には、大きな違いがみられる。¹⁾²⁾⁴⁾¹¹⁾このような違いを吸収して、すべての生徒に運動の楽しさや喜び（機能的特性）を味わわせると共に、自己の能力、適性等に応じて主体的に運動に親しませるようにするために、生徒一人一人が楽しさや喜びを体得できるような学習を展開していく必要がある。¹⁾²⁾¹¹⁾

(3) 選択授業の配分

選択教科に充てる授業時数は、学校教育法、施行規則第3章中学校第54条より、第一学年 105～140単位時間、第二学年 150～210単位時間、第三学年 140～280単位時間とされているが、第一～三学年までの105～140単位時間は、外国語に充てられ、第二及び第三学年の残りの単位時間のうち、35時間の範囲内で選択教科に充てる事ができる。

したがって、選択教科としての保健体育については、年間35単位時間の範囲内で教科の目標を実現するために必要な時数を、各学校において適切に定めることとなる。¹⁾²⁾³⁾¹⁰⁾

2. 運動領域、運動種目の選択

選択授業を行う場合、「どの運動領域から何の運動種目を選択すれば良いのか」という事が重要である。¹⁾¹¹⁾

運動領域や運動種目の取扱いについては、次の様に説明されている。

(1) 体操

体操は、各学年とも必修である。

体操の内容として示されている「身体の柔らかさ及び巧みな動きを高める運動」「力強い動きを高める運動」「動きを持続する能力を高める運動」も全ての学年で学習する事となる。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(2) 器械運動

器械運動は、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、器械運動、陸上競技、水泳のうちから2領域（第三学年では1又は2領域）を選択して学習する。

運動種目は、各学年とも、マット運動、鉄棒運動、平均台運動、跳び箱運動のうちから2又は3種目を選択して学習する。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(3) 陸上競技

陸上競技は、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、器械運動、陸上競技、水泳のうちから2領域（第三学年では1又は2領域）を選択して学習する。

運動種目は、各学年とも、競走種目（短距離走・リレー、長距離走、障害走）、跳躍種目（走り幅跳び、走り高跳び）のそれぞれから選択して学習しても良い。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(4) 水泳

水泳は、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、器械運動、陸上競技、水泳のうちから2領域（第三学年では1又は2領域）を選択して学習する。

運動種目は、各学年とも、クロール、平泳ぎ及び背泳ぎのうちから選択して学習しても良い。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(5) 球技

球技は、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、球技、武道、ダンスのうちから2領域を選択して学習する。

運動種目は、各学年とも、バスケットボール又はハンドボール、サッカー、バレーボール、テニス・卓球又はバドミントン、ソフトボールの中から2種目を選択して学習する。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(6) 武道

武道は、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、球技、武道、ダンスのうちから2領域を選択して学習する。

運動種目は、各学年とも、柔道、剣道又は相撲のうちから1種目を選択して学習する。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(7) ダンス

ダンスは、第一学年では全ての生徒が学習しなければならないが、第二・三学年では、球技、武道、ダンスのうちから2領域を選択して学習する。

創作ダンス及びフォークダンスについては、これらのうちから選択して学習しても良い。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

(8) 体育に関する知識

体育に関する知識は、主として第一・二学年で全ての生徒が学習する。内容は、運動と心身の働き及び体力の測定と運動の練習である。¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾

3. 選択授業の実施と工夫

選択授業を実施する場合、その手順を押さえ、各学校の実態に応じて検討する必要がある。

手順としては、学校内の調整、オリエンテーション、学習活動、評価の四つを挙げる事ができる。¹⁾¹¹⁾

それぞれについての内容は、次の通りである。

(1) 学校内の調整

選択授業を実施する際、まず学校内の教員間での共通理解が必要である。事前に十分なディスカッションを行い、教員間での選択授業の取り組みや現有教員で開講できる種目の検討、時間割編成の研究等を行う。又、体育教員だけでなく、学校全体の理解と協力が得られる体制を整える必要がある。¹⁾²⁾¹¹⁾

次に、学校内の施設を最大限有効に活用できる内容の検討をしなければならない。各学校によって施設に違いがあるため、生徒が選択できる種目等が制限されてしまいがちである。それを少しでも解消するために、できるだけ有効に施設を活用する事が必要である。又、現在のままでは、施設設備が不十分な場合が多いと思われるので、これを充実させていく必要もある。⁷⁾¹¹⁾¹³⁾

これに加えて、生徒の運動に対する意識調査等を行い、生徒側の意見を事前に集約しておく事も重要¹¹⁾である。

(2) オリエンテーション

選択授業の意義・ねらいを生徒が十分理解できるように説明し、学習にあたっての心構えができるようにする。その際、選択の領域、種目、内容等を盛り込んだ資料を作成し、生徒側から

理解しやすい工夫も必要である。

又、指導教員の人数や施設を考慮し、運動種目別の人数調整を行う。¹⁾²⁾¹¹⁾

(3) 学習活動

選択授業を行う場合、生徒が自己の特性に応じて運動領域や運動種目を選んで授業に取り組まなくてはならない。この点を考慮し、学習活動を工夫していく事が必要である。

まず、導入の段階では、生徒に学習のねらいや授業の進め方などを理解させる事が重要である。先に取り上げたオリエンテーションに十分な準備と時間をかける必要がある。¹⁾²⁾¹¹⁾

学習の場が体育館、グラウンドを同時進行する等、多様となる場合も考えられるので、施設設備を有効に利用し、安全には十分配慮しなければならない。

また、選択制のポイントである自らが選択したという意志を自覚させ、自発的、自主的に学習に取り組む態度を育てることも重要である。¹⁾²⁾¹¹⁾

次に授業展開の段階では、体操、器械運動、水泳、陸上競技のように個人種目の場合、学習ノート等の作成を行い、各人が現在の力量を考慮し、課題を確認しながら、学習を進めていき、次第に新しい課題を克服していく事が必要である。

また、球技等のゲーム種目の場合、個人での学習ノートのほかに、作戦に関する資料やゲーム分析が行える記録用紙を活用する¹⁾²⁾¹¹⁾ことも効果的である。

教員は、生徒の課題が適切であるかどうかを確認しながら、つまずきの見られる生徒への適切な指導と助言⁷⁾¹¹⁾が重要な役割となる。

授業の整理の段階では、生徒それぞれが反省、評価を行い、次の授業へ活かされるよう配慮する。また教員側も、指導の成果を振り返り、その後の指導に活かせるようにする。¹⁾¹¹⁾

(4) 評価

これまでの学習評価は、体力の向上やより高度な技術の習得をねらいとする体育の考え方のもとで、運動技能の高・低や運動課題の達成度が重要な観点¹⁾としてとらえられてきた。

しかし、これからの体育は、生涯体育、ス

スポーツを志向し、運動の特性に触れる楽しさや喜びを深め¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾させようとしている。

つまり、これからの学習評価は、「運動の特性の求め方(運動の学び方)」と、それによって「運動の特性に触れる楽しさや喜びがどの程度深まったか(運動の楽しさ体験)」という2つの観点を軸にしながら考える¹⁾ことが重要となる。

さらに、運動の楽しさや喜びの深まりは、学習の仕方やマナーといった「行動の仕方や態度のレベル」と「運動の技能レベル」の高まりと密接な関係にあり、また運動技能についても「運動課題の達成度」と「技や動きのできばえ」という観点からもとらえておく必要がある。¹¹⁾ 選択制授業の場合、このような観点をもとに学習評価を進めていくことが重要である。

学習評価を進めるに当たっては、「何を評価するか」とともに「いつ、誰が評価するか」を考える事が大切¹⁾である。

選択制授業では、生徒一人一人の特性と自己学習力を大切に¹⁾²⁾³⁾¹¹⁾しなくてはならない。したがって、学習評価も生徒の「自己評価」を中心に進められなければならない、また学習の終わりではなく、学習の過程における評価が重視¹¹⁾されなければならない。そのために学習カードを作成する等の工夫が必要となってくる。

学習カード等における判断材料の内容は、「自分にふさわしい課題を設定して行っているか」「自分の力にふさわしい課題を設定して行っているか」「自分の力を十分発揮できるようなゲームや練習の仕方をしてしているか」「その運動の楽しさ、喜びを味わうためにルールや活動の仕方等工夫しているか」¹¹⁾等を織り込む事が必要である。

選択制授業における評価は、観点別学習状況の評価が適切に行われるかどうか¹⁾¹¹⁾にかかっているため、各学校ごとの施設設備、教員数、開講科目の違いを考慮し、各学校の内容に即して、具体的な評価基準を設定していく¹¹⁾¹⁸⁾ことが重要となる。

4. 選択制授業の問題点

選択制授業には、さまざまな長所や効果を挙げることができるが、同時に数多くの問題点も指摘されている。ここでは、選択制授業をより効果的に実践するために、その問題点を取り上げることとした。

問題点1、生徒一人一人の個性、能力、興味、関心等はさまざまであり、その欲求全てを満足させる選択授業を展開するには、膨大な指導者、施設設備、費用が必要となり、現実にはかなりの無理が生じる。¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾

問題点2、生徒の希望と、それを受け入れる条件は、一致しない事が多い。つまり、志願者と定員にズレがあり、教師側が選抜しなければならず、選択制を取り入れても生徒の希望を全て受け入れる事はできない。¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾

問題点3、生徒の自由な選択を行った場合、生徒側(特に体育が嫌いな生徒)は、楽な授業や甘い教師に集中し、本来の目的とは別の選択となる可能性がある。¹³⁾¹⁴⁾

問題点4、選択制は、自己の能力、興味、適性等によって選ぶ事が必要であるが、生徒間の仲の良さ等が選択に大きな意味を持ち、仲よしグループで種目等を選択するといった事が起き、個人としての能力を伸ばすに至らないケースが有り得る。¹³⁾

問題点5、選択時点において、生徒がやりたい事、好きな種目等を選ぶ事となるが、中学生の様に発達段階にある生徒が、自分では自覚していない能力がやらされたり、やってみて発見される場合もあり、その機会が減ってしまう可能性がある。¹³⁾

以上のような問題点を挙げる事ができるが、このような問題点を考慮し検討していく事でより良い選択授業の実践に役立てる事ができると考えられる。

ま と め

本研究では、中学校体育における選択制授業についての考え方及び授業の工夫、評価についてまとめ、選択制授業を実施する際の資料を提出する事を目的とした。

現在、各学校において、様々なかたちで選択制授業が行われている。この実践にあたっては、多くの選択肢を設けたり、授業内容に工夫をこらす等、教師側にかなりの努力が必要である。また、生徒側からの希望を少しでも多くかなえようとするれば、必然的に教師は、その授業実施のためにかんがりの時間と労力をとられ、事後の授業研究に充てる時間まで削られてしまう事もある。

そのため事前に、教師側が現在発表されている様々な事例を参考に、各学校の状況に合わせた選択制授業を工夫し、効率的に授業を展開していく必要がある。

しかし、最終的には、各学校各教師がそれぞれ自分の授業、学校の授業を作る必要があると考えられる。これまでの実践例やその問題点、長短所を考慮した上で試行錯誤しながら、教師側も生徒側も共に満足 of いく選択授業を工夫していく事が最も望ましいかたちである。

参考文献・引用文献

- 1) 文部省「指導計画作成の学習指導の工夫」東山書房 1991
- 2) 文部省「中学校指導書」大日本図書(株) 1992
- 3) 文部省「中学校学習指導要領」大蔵省印刷局 1993
- 4) 松田岩男 宇土正彦 杉山重利 「新しい体育授業の展開」1990 pp4~24
- 5) 松田岩男 宇土正彦 杉山重利 「新しい体育授業の展開」1990 pp82~91
- 6) 永島惇正「体育科教育一年間指導計画、単元計画の基本的な考え方」大修館書店 1993 3月号
- 7) 赤松喜久「体育科教育ー選択制授業の現況と展望ー」大修館書店 1993 3月号
- 8) 中村政一郎「体育科教育一年間指導計画作成上の検討課題ー」大修館書店 1993 3月号
- 9) 常木己喜雄「体育科教育ー慎重に無理なく地味にー」大修館書店 1993 3月号
- 10) 杉山重利 園山和夫「新体育科教育」(株)ぎょうせい 1993 pp66~69
- 11) 杉山重利 園山和夫「新体育科教育」(株)ぎょうせい 1993 pp129~168
- 12) 宇土正彦「体育科教育ー選択制授業入門ー」大修館書店 1994 3月号
- 13) 新堀通也「体育科教育ー生涯学習と選択制授業ー」大修館書店 1994 3月号
- 14) 出原泰明「体育科教育ー選択制授業で問い直すー」大修館書店 1994 3月号
- 15) 小林一久「体育科教育ー選択制授業成立の条件ー」大修館書店 1994 3月号
- 16) 細江文利「体育科教育ー選択制授業のキーワードー」大修館書店 1994 3月号
- 17) 品田龍吉「体育科教育ー選択制授業の評価ー」大修館書店 1994 3月号
- 18) 高橋京子「体育科教育ー中学校におけるケーススタディーー」大修館書店 1994 3月号